子どもたちに核兵器のない世界を

核兵器廃絶めざす
全教メールニュース
第５０号　2010.9.21.

原水爆禁止世界大会の報告と被爆体験を聞く会で青年７人が報告　（9/18 都教組北多摩東支部）

「核兵器廃絶へ世界は確実に動いていると確信した」「職場の若者の間でも話題になった」

原水爆禁止 2010 年世界大会の「広島からのよびかけ」は、「核抑止力」論を打破するうえで被爆の実相を広めることが決定的に重要であり、被爆者の体験を聞き取り、発信・普及・共有していく運動を「人類的な事業」として繰り広げようと呼びかけています。

都教組の北多摩東支部は、18 日、都教組や同支部から世界大会に参加した７人の青年を含む 15 人が集まり、世界大会の報告と被爆体験を聞く会を開催しました。

世界大会に初めて参加した組合員は、「４月に組合に入り声をかけてもらい参加することができ、今の世界が核兵器や戦争に反対する人々の地道なとりくみの上に成り立っていることを実感しました」「各国の平和活動家のスピーチを聞いて核兵器廃絶という大きな目標に向かって世界は確実に動いていると確信しました」「自分ができることは何かを考えるきっかけができました。子どもたちに原爆の恐ろしさを伝え、核兵器はなくさなくちゃいけないと教えていきたい」「建物疎開で被爆死した中学生や女学生の石碑に彫られた名前を読んでいるうちに、自分のクラスの子どもたちの顔が浮かんだ。二度と繰り返してはならないと、生徒にも話をしました」など、被爆地・広島に行き大会に参加して受けとめた思いを報告しました。また、世界大会に連続して参加した青年は、「核抑止力論をどう乗り越えるか、公正な目で事実を知り判断しなければならない。岩国と呉の基地調査行動に参加し、被爆の経験を持ちながらアメリカの軍事力に頼り支援する日本の政治の異常さを実感した」「核の傘を振り捨てなければならない。教員として、私たちにできる Action は無限にある。核抑止力論の間違いを小学校１年生にどう説明できるか考えている。地元の地区協でも、８月末に被爆者の会の会長さんに来てもらい話を聞く会をもち、若い先生に聞いてもらった」と、報告しました。

都教組北多摩東支部は、今年も６人の青年を世界大会に職場のカンパで派遣しましたが、毎年、組合に加入して間もない組合員が希望して参加しています。職場や組合の会議で参加の報告をすることで、教職員の間で核兵器廃絶が話題になり確実にとりくみが広がっています。報告会でも、職場の若者の飲み会で「どうだった？」「私も行ってみたい」と話題になった、感想を載せた組合ニュースをじっと読んでくれる青年もいて嬉しかった、副校長が「うちの息子も行ったんだ」と声をかけてくれた、校長から「ぜひ子どもにも伝えてください」と激励されたなど、職場での対話の広がりを交流しました。

被爆者の被爆体験を聞き、被爆の実相に向き合う学習と実践の出発に

報告会に続き、広島で 18 歳の時に、爆心から 500 メートルの電話局で被爆した出島艶子さん（三鷹市被爆者の会）から被爆体験を聞きました。顔に大けがを負い体中にガラスが刺さりながら爆心地を歩いて逃げたこと、隣にあった袋町小学校の子らがやけどで顔を腫れあがらせ皮膚を垂れ下げて「痛いよう」と泣き叫んで歩いて行ったこと、家を焼かれ父が死に、姉と弟を探しに焼け野原の死体を探し歩いたこと、戦後 37 年もたって孫が突然に血小板減少症で入院したことなどの体験を語り、「被爆者は死ぬまで子や孫のことを心配しつづけなければならない」と原爆の恐ろしさを告発しました。涙ぐみながら聞いた青年は、終了後、出島さんを囲んで懇談し、腕に刺さったままのガラス片をさわり、原爆被害の怖さを体感しました。出島さんは、聞いてくれる若い人や子どもたちがいてくれることが元気の源と言っていました。

こうした被爆者の話を聞く会は、組合員や若い教職員が原爆の被害と恐ろしさを直に聞き、核兵器のない世界をつくる運動と平和教育の担い手として成長していく大事な機会です。ぜひ、全国各地で、とりくみましょう。